

大学の名声

2026年1月5日
学長 田林 暁一

多くの若者は名声に憧れる。

昨年12月の第2回学長カフェに際して、「仙台青葉学院大学・仙台青葉学院短期大学の名称は青森県でよく知られていない。名声を上げる対策を充分に行っているか。」という手厳しい意見があった。種々思考した末に下記のように答えた。本学の短期大学部門は2009年に開学し、また大学部門は2024年に開設し、教育の基本方針は建学の精神にある「教養教育」、「対人教育」、「実学教育」の三本柱である。最近、その中身を明確にするために、大学の学生への使命として「友をつくる」、「地域とつながる」、「未来ひらく」を提示し、それらの使命を果たすべく教育を行っている。教育を受けた学生が卒業し、種々の職場で働いた時、先輩、また上司から「頑張っている」、また「良くできる」と言われ、出身大学はどこかねと聞かれる時もあるだろう。その時は、はっきりと自分の言葉で「仙台青葉学院大学、また短期大学」ですと答えて欲しい。そして「せいよう」は「青葉」と書き、生き生きとして悠然とした感じを表していると追加してほしい。そのように大学を誇りに思い、かつ実践力等に優れた学生が増えてくると本学の名声は多いに向上するように思う。つまり、上述の流れは教職員と学生が一体となったもので、この形が最も効果的な方法と考えている。

大学の名声を上げる手段として一般的に教育力、社会貢献力、研究力、経営能力、学生支援力、また国際性等が取り上げられるが、大学の歴史、規模、資金力、在所、宣伝・広報力等によって大きく左右され、結果として有名国公立大学、及び私立大学にはかなわない。名声が急に上がる場合と時間をかけて上がる場合の二つのパターンがある。前者は大学の運動クラブの全国大会優勝、在学生、また卒業生がコンクール等で表彰されたりすると一気に上がるが、その機会はそんなに多くはないだろう。時間の経過とともに徐々に名声を上げていくという手法が多用され、この手法で大事なのはわかりやすい教育内容、親身な学生支援と年毎の達成度の提示である。

それらの結果として生まれる学生の母校への想いが大事で、その内容として、「卒業した大学の誇り」、「自信が加味された他人への推薦」、「卒業後の大学再訪の想い」、「強い懐古感」、また「指導教官の思い出」等がある。

私が卒業した高校と大学の思い出は時々翻り、なんとも言えない気持ちになることがある。時に教わった先生方を思い出すことがあり、特に印象に残っているのは「ゴリラ」というあだ名がついた漢文の先生で、見るからに漢文学の教官という様相であった。もう一人は英語の先生でいつもオックスフォード辞書を携帯して講義に来られ、この先生も正に英文学の教官という様相を呈していた。上述のような思い出も含めて、本学の印象が卒業生の多くに残るようになれば名声は次第に上がっていくと思う。